

一 乗 海 釈

小林 昭 英

昨年の行一念釈・信一念釈に引き続き、親鸞の名著たる『教行信証』『行巻』の一乗海釈を窺う。

一乗とは一は無二に名づけ、乗は運載の義である。我々凡夫が大菩提に到達するには余乗では不可能であるから、唯、本願一乗とゆうのである。

一乗海釈は「教巻」の結文に「一乗究竟之極説」、「行巻」に大行の徳を述べた処に「真如一実功德宝海」、行一念釈の「大利無上者、一乗真実之利益也」とあるのと、引釈段の御私釈に「選択大宝海」とある海を承けて、南無阿弥陀仏の行が一乗真実の教であることを顕示してある。

一乗海釈は三項に分れ、第一項は一乗を釈し、『涅槃経』の四文と『華嚴経』の一文とを引いて、「爾者、斯等觉悟皆以安養淨刹之大利、仏願難思之至徳也。」と結示してある。

第二項は「言レ海者」以下に海を釈し、『大経』の一文と『淨土論』の二文及び善導の二文、即ち「玄義分」と『般舟讚』が引かれ、最後に『樂邦文類』の一文が引かれている。

第三項には一乗を対顯してある。

いずれも誓願一仏乗の勝徳を讃嘆するものであり、『大経』の「名声超十方」に答え、法然の『選択集』『本願章』に於ける勝易二徳の勝徳をたたえたものである。

本願一乗が一代仏教の行法中、最勝最高の一乘法であり、四家大乘と匹敵して決して劣るものでない事を証明してある。

「一乗海」の語は善導の「玄義分」に「我依菩薩頓教一乗海」を出処とし、「一乗海」の内容を釈し、「一乗者大乘、大乘者仏乗」等とあるのは『勝鬘経』の「一乗章」第五に、

「大乘者即是仏乗。是故三乗即是一乗。得二乗者。得阿耨多羅三藐三菩提者。即是涅槃界。涅槃界者即是如来法身。得究竟法身者。則究竟一乗。無異如来。無異法身。如来即法身。得究竟法身者。則究竟一乗。究竟者即是無辺不斷（中略）即是大乘無有三乘、三乘者入於一乗。一乗者即第一義乘。」（大正藏經十二—二二〇）

とあるによられてゐる。

従つて「言^二一乗海^二者^一」から「唯是誓願一仏乗也」までは『勝鬘經』の文である。

「一乗者即第一義乘、唯是誓願一仏乗也。」と述べて、唯、本願念仏の法のみ一乘法にして、他は全て方便法なることを明かされている。

かくの如く初め法華・華嚴等成仏を述べるもの皆一乗といひ、後に真宗のみを誓願一仏乗とし、唯一真実として、他を悉く方便とされるのは、行に約する時は必ずしも断惑証理におちいるきらいがあるからである。法然は『漢語灯録』巻一に、

「天台・真言皆雖^レ名^二頓教^一、(然彼)断惑(証理)故猶是漸教也。」(明^三未^レ断^レ惑(凡夫直)出^三過^二三界之長迷^一(夜^レ者、偏是^レ比教)故、以^レ比教^二為^二頓中^一(之)頓^二也^一。」(真宗聖教全書四一—二六四)

といつてある。聖道一般の教を方便とし、本願円頓一乗のみを真実とし、一乗の体は誓願一仏乗にあること「唯是誓願一仏乗也」と親鸞はあらわしている。

彼は『勝鬘經』の語を以て一乗を解釈されるが、唯、經語を用い、經意を取らないのであるから『勝鬘經』という經名を出されないのである。

この經典は三車家の經典であり、四車家に属する親鸞はそ

のまま用いる事が出来ないので多々変更している。

『教行信証』一乗海釈では、

「言^二一乗海^二者^一、一乗者大乘、大乘者仏乗。得^二一乘^一者、得^二阿耨多羅三藐三菩提^一。阿耨菩提者、即是涅槃界、涅槃界者即是究竟法身。得^二究竟法身^一者、則究竟一乘。无^二異如来^一、无^二異法身^一、如来即法身。究竟一乘者、即是无边不断。大乘无^レ有^二三乘^一、三乘、二乘、三乘者入^レ於^二一乘^一。一乗者即第一義乘、唯是誓願一仏乗也。」(真宗聖教全書二一三八)

とある。

一乗の体を出す中「大乘無^レ有^二三乘三乘^一、二乘三乗者入^レ於^二一乘^一」と三乗の語を二度まで加えている文は『勝鬘經』と相違している。

『勝鬘經』には「声聞縁覚乘皆入^二大乘^一、大乘者即是仏乗、是故三乗即是一乗」といい、後に「大乘無^レ有^二三乘^一、二乗者入^二於^二一乘^一」とある。

一乗海釈では「唯是誓願一仏乗也」とある。これは本願念仏のみを一乘法にして他は全て方便法なることをあらわしている。

聖道はこの三乗、即ち、声聞乘、縁覚乘、菩薩乘の法におさめられるから、これらは悉く自力法にして、誓願一仏乗たる他力法に比べ劣るものと転釈されている。

即ち『法華經』に「二もなく、亦三もなく、唯一乘法ある

のみとある文を『勝鬘經』の文と融合されたものであると推測される。

一乗の証文として『涅槃經』と『華嚴經』の文を引用されている。『教行信証』中諸經を引用してあるが、最も多く引用されているのは『涅槃經』と『華嚴經』である。

これらの兩經を引用されているのは、『教行信証』「教卷」の信樂釈、「化身土卷」に第二十願の行者は真実の他力ではないとある処にこの二經がひかれている。

『涅槃經』の引文の四つの中、第一文には「実諦者、一道清淨、无レ有レ二也。」とある文を以つて一乗無二を明し、第二文は「諸仏菩薩、為レ衆生三故、分レ之為レ之。」とあり、開一説三を示し、第三文は「究竟畢竟者、一切衆生所レ得一乗。一乗者名為レ仏性」とある故に究竟は一を明すのである。第四文は「云何非一、非非一無教法故。」とあり、三一雙非を明すのである。

次に『華嚴經』には「一切無導人、一道出レ生死。」とあるのは一道無二を明すのである。

かくて『涅槃經』、『華嚴經』は親鸞にとつて「安養淨刹之大利、仏願難思之至徳也。」と受け取られている。

次に、一乗海の海の心の説明がある。種々雑多な徳、どの様な水でも海に入れば、とけあい一味となり、溺れた屍骸を海岸にうちあげてしまふ不宿屍骸の徳、深く広大な深広の徳

を以つて、本願一乗法のすばらしさを説いてある。

「言レ海者從レ久遠已來、転ニ凡聖所修雜修雜善川水、転ニ逆謗聞提恒沙無明海水、成ニ本願大悲智慧真実恒沙万徳大宝海水、喻ニ之如レ海也。良知、如レ經說言ニ煩惱水解成ニ功德水。願海者不レ宿ニ二乗雜善中下屍骸、何況宿ニ人天虛假邪偽善業雜毒雜心、屍骸ニ乎。」（真宗聖教全書二二三九）

とあり、逆謗聞提が転じて恒沙の万徳となり、恒沙の無明が転じて智慧真実となる。

前者の逆謗聞提が恒沙の万徳となるのは、

『高僧和讃』の

「名号不思議の海水は

逆謗の屍骸もとゞまらず

衆惡の万川帰しぬれば

功德のうしほに一味なり」

後者は『高僧和讃』の、

「尽十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば

知慧のうしほに一味なり」

を意味する。

海の釈に「如レ經說言ニ煩惱永解成ニ功德水」とあるのは『維摩經』の「不断煩惱而入涅槃宴座」と「煩惱泥中乃有衆

生起仏法身」とあるのと作語されたと考察される。

引文中「大経」の一文と『論註』の二文との中、「大経」と『論註』の大衆功德の文とは下宿屍骸の徳を彰し、「不虛作住特功德」は一味無差を証明するものである。

次に、善導の二文中「玄義分」の文は、一乗海の出扱を示し、『般舟讚』の文は四家大乘も第十八願法に比較すると漸教であることを示し、機法共に頓なるは唯一つ、誓願一仏乗であることを述べてある。

『樂邦文類』の文を引かれるのは、万川衆流も大海に流入すると一味無差となる様に、雑善も逆謗も本願海に帰入すると同一の功德味となる。雑善を海水といい、無明を海水といわれている。

然るに眞実に雑善の虚役雑毒を知り、逆謗無明を打ち破るものは本願眞実の叡智である。

『樂邦文類』を引用されたのは、この様な事を証明し、一乗海の徳を助顕するためである。

次に比較顕勝で、比較対論が出されている。

「然就レ教念仏諸善比較対論」とあり、二教対、二機対といい、機と教の両方が述べてある。

教について四十八対出されており、機教対論については『二巻鈔』（真宗聖教全書二一四五九）にも示されている。

二機対は『教行信証』が十一対、『二巻鈔』は十八対あり、

数が増減し、二教対に出ているのが二機対に出ているのもある。

色々の面から比較をし、「然按本願一乗海」と結び、二機対の方は「然按三乗海之機金剛信心、絶対不二之機也」といい、このすばらしい念仏と比べるものはないという事である。

この釈の終りに、

敬白一切往生人等。弘誓一乗海者、成就无碍无边最勝深妙不可說不可稱不可思議至徳。(中略)・乘一切智船、浮諸群生海、円満福智蔵、開顕方便蔵。良可奉持、特可頂戴也。(真宗聖教全書二一四一)

とあるのがこれである。この中が二段に分れ初めより「猶如三大風、普行三世間无レ所レ导故。」(真宗聖教全書二一四二)まで広く譬によせて衆徳をたたえ、「能出三有繫縛城、」より最後まででは結嘆勸帰の文である。

この譬喩の出扱は、『華嚴経』入法界品に、善財童子の菩提心の功德広大なことを弥勒菩薩が讃嘆される処に出扱がある。

尚、『大経』には浄土に於ける聖衆の徳を讃嘆される中に猶如大地等の二十句が説かれているが、その中の譬もこの二十八喻の中にある。

いずれも誓願一仏乗の勝徳をたたえ、『大経』の「名声超

十方、『選択集』本願章の勝易二徳を讃嘆したものである。

以上、一乘海釈をみてきたが『勝鬘經』、『法華經』、『維摩經』の三經によつておられることが明瞭である。

聖徳太子はこの『三經』に『三經義疏』までつくられたほど傾倒されている。又親鸞がその太子を非常に讃仰されている。

親鸞が晩年に「太子讃仰和讃」をつくつてゐるが、『正像未和讃』に「太子和讃」十一首、『皇太子聖徳奉讃』七十五首、『大日本国聖徳大王聖徳太子奉讃』百十四首、都合百九十首ある。

「太子和讃をみると、

「和国の教主聖徳皇

広大恩徳謝しがたし

一心に帰命したつまり

奉讃不退ならしめよ」

の様に讃仰されている。

しかし晩年をまつまでもなく、生涯一貫していかに太子を敬慕しておられるかが窺える。

日本仏教はこの太子の『三經義疏』により基盤が出来、日本仏教の原点ともいふべきものである。

親鸞は太子を七高僧の一人に挙げ、一乘海釈の骨組みを全くとつておられるのである。

寄稿されなかつた諸氏の発表題目(三)

わが国上代の仏教信仰受容について	伊藤 真徹
印融法師とその周辺	伊藤 宏見
人と法の問題—太子義疏を中心に至上の人格論をさぐる—	稲津 紀三
バガヴァッド・ギーターの実践思想	今西 順吉
歎異抄における悪	植野 光悟
Amrita-gudha(無量清浄)名義について	宇治谷祐顕
女裝訳の特質	大鹿 実秋
法然と逆修	大谷 旭雄
Sanghaheda-Vastu について	大友 利行
天台智顛の感応思想—観音玄義を中心として—	大野 栄人
中世西域人の仏教信仰の諸相	小笠原宣秀
“mila”をめぐる	寛 無閑
原始仏教における業の問題	櫻尾 慈覚
Srenikah parivrajakah	梶山 雄一
無性年代考	片野 道雄

(二四二頁につづく)